

宗祇・肖柏・実隆の『源氏物語』研究

中 城 さと子

【要旨】

宗祇・肖柏・実隆の三人の手沢本の本文が兼良の耕雲本に由来するものであったことをまず提示する。宗祇の源氏講釈を核とした三人の共同研究で青表紙本化が大きく進捗したことを、現存している兼良著『源氏和秘抄』・宗祇著『紫塵愚抄』・肖柏著『源氏物語聞書』の調査を行いその調査結果から読み解く。この分析の基盤には、三人の共同研究のスタートした時点の本文が同一本文とみなせるものであったこと、三人の共同研究の終了時まではその本文状況であったこととする考えがあり、また、この青表紙本化に寄与した校合本に正徹本があったとする考えがある。これらの考えに基づいて論じた。そして、三人の共同研究の終了後には、三人はそれぞれの研究に入ったと推測されるが、これについてはあまり論じることが出来なかった。

はじめに

三条西家の家本は、文明一七年¹⁴⁸⁵閏三月二日に書写となり成立した文明本（以下、当初の書入れのない状態の本を「原態文明本」と、書入れの入った状態の本を「書入文明本」と称する場合がある）を始発とし、何回かの売却と再生を経て日大本と実枝本（蓬左文庫蔵）へと展開した⁽¹⁾。この原態文明本は、実隆邸で宗祇と肖柏を迎えて行われた同年同月二八日に開始された源氏講釈の受講に備えて作成された。

連歌師の古典研究は、宗祇に到って一挙に開花し、宗祇が『源氏物語』（以下『源氏』）を本格的に研究するようになるのは一条兼良の教えを受けるようになってからとされ⁽²⁾、中院家の出の肖柏の方は、一条兼良に学ぶとともに宗祇の門人となり宗祇から古今伝授を受け堺伝授の祖となった。当初の実隆を含む三人を見ると、師匠格は宗祇であり、受講者は実隆、中間的存在が肖柏である。したがって、この源氏講釈で使用されたテキストは、師匠格の宗祇の本と推測する⁽³⁾。

しかし、宗祇所持の『源氏』は伝来せず、その著作である『紫塵愚抄』（長享二年¹⁴⁸⁸以前の成立）『雨夜談抄』（文明一七年¹⁴⁸⁵七月の成立）、その他に見られる引用本文から推測するしかないが、あまり忠実な引用ではなく、細部までは確かなことは分からない⁽⁴⁾。このような状況だが、本稿では、宗祇・肖柏・実隆三人に着目して論じる。

一 宗祇・肖柏・実隆の『源氏物語』研究と手沢本

宗祇・肖柏・実隆が『源氏』研究を始めたのは宗祇が東国から帰京（文

明五年¹⁵⁷³秋⁽⁵⁾）したところであった。すでに触れたとおり、指導者の役目を担ったのが宗祇であり、実隆は教えを受ける立場で、二者の中間に肖柏がいた。そして、三者の『源氏』研究が共同でなされたのは、宗祇の源氏講釈（文明一七年¹⁴⁸⁵閏三月二日～翌年六月一日）の期間中である。

源氏講釈を受講するために用意されたのは、先述したとおり実隆の本は宗祇の手沢本を写して成立した文明本であり、肖柏の本は文明八年¹⁴⁷⁶に新写した手沢本⁽²⁾であったと推測される⁽⁶⁾。つまりこの講釈の開始時の三者の手沢本は、かつて兼良の講釈を受講したことのある宗祇の本は兼良本写し、同様に肖柏の本も兼良本写し、実隆の本が宗祇本写しであり、三本とも同文と見做せるものである。つまり、講釈の開始時から本文校訂の側面のあったろう共同研究の終了時（講釈終了ころ）までの間は、三本が同一視できる本文であったと考える。この三本には講釈中での書入れが加わり、一年余りかかった講釈の終了後には、実隆の手沢本である文明本には多くの書入れが入っていたであろうが、実隆はこの手沢本を永正三年¹⁵⁰⁶まで使い続ける。一方、講釈終了（文明一八年¹⁴⁸⁶六月一日）後、宗祇については新たに宗祇手沢本⁽²⁾⁽⁷⁾が、肖柏については肖柏手沢本⁽³⁾が作成された⁽⁸⁾、と推測される。

二 三人の『源氏物語』研究の出発点としての耕雲本

三人の『源氏』研究の先達であった宗祇の本がどのような本であったかについて論じるとともに、肖柏の本、実隆の本についても考える。

(二) 宗祇の本

青表紙本を宗祇に伝えたとされる人物に志多良がいる。宗祇の本はこの人物の本を写したものであろうか。

1 志多良

志多良の出てくる『紹巴抄』(安田女子大学図書館蔵稻賀文庫)の巻頭部分を掲出する(本文はミセケチ後のものとし、字体は通行のものに改めた)。

此物語に本の差異あり 定家卿御自筆青表紙 中比断絶のやうなりし事は 河内守光行源氏物語を取分もてあそはれしまゝ、河内本と世間に云ならはせり 耕雲ハ花山院ノ御祖流ノ河内本を伝して心得かたき所ノをなをされし本を用給ひ 紫明 水源 両抄に御会尺有て河海抄御述作といへり 花鳥余情又おなし 爰ニ宗祇定家卿御本の御流を床敷思はれて 志多良ハ奉公ノ人也ノと云し人にあひ申され 青表紙伝授して後 猶不審を一条禅閣御所へきはめて 三条西殿ハ内府ノ逍遙院殿ノへ講釈申さるゝといへとも 禁中のふかき事は逍遙院殿へ尋申されし事とあり(後略)

まず、宗祇が志多良から受けたとある「青表紙伝授」とは「青表紙本五四帖を伝受した(受け継いだ)」意なのか。それとも「青表紙本についての秘説めいたことを伝受した」意なのか。

一般的に「伝授(受)」とは、「伝えを授(受)けること。特に学問・宗教・芸道などの奥義や秘事の伝えを授(受)けること」である。これ

より類推すれば、宗祇が受けた「青表紙伝授」とは「青表紙本についての秘説めいたことの伝えを受けた」の意ではなからうか。そして、「秘説めいたこと」とは、「青表紙本の特徴」ではなかったか。例えば、大内政弘(1446～1495)が猪苗代兼載(1452～1510)に命じて作成させたという『源氏物語青表紙ハ定家流ノ河内本分別条々』(延徳二年1490成立)などの類いではなからうか。書物の形で教えたかどうかは分からないが、簡便に青表紙本であることを鑑定できる箇所を宗祇は志多良から教わったのであろう。つまり、宗祇の最初の所持本は志多良の本を写したものでない、と判断する。

それでは、兼載が『源氏物語青表紙ハ定家流ノ河内本分別条々』を著し得たのは、独力によってなのか。いや、兼載も誰かから教わって著したはずである。兼載にそれを教え得たのは、誰なのか。

松原一義氏の論文「木戸孝範と『塵荊抄』の成立―付「志多良」のこと―」⁽⁹⁾に、金子金次郎著『連歌師兼載伝考新版』(桜楓社、一九七七)に関連記事があるという。その記事(京都大学蔵『源語秘訣』(兼良著。谷村文庫での書名は「源氏秘訣」)の部分を用用する。

(前略) 兼載ハ宗祇ヨリハ三ケノ事、直には不聞給也。木戸殿ヨリ口伝ス。宗祇も木戸殿ヨリ口伝なり。(後略)

『源語秘訣』のこの記事は、「木戸殿」(孝範)が連歌界の巨匠である宗祇・兼載に「源氏三箇大事」の口伝をしたと伝えている。孝範は、『源氏』について宗祇・兼載に指導していたのである。兼載が前掲書を著し得たのは、独力によってではなく誰かから教わって著したはず、と推測

していたが、師は木戸孝範であつたようだ。おそらく兼載に『源氏物語青表紙』定家流・河内本分別条々』をまとめさせ得た孝範の指導があり、宗祇に対しての同様の指導について紹巴は、「青表紙伝授」と記したのである。

木戸氏は、下野足利庄木戸郷を本拠とする代々関東管領の重臣であり、父範懷（小府）は四代鎌倉公方の足利持氏に近侍した。そして、孝範自身は、鎌倉公方が堀越公方と古河公方とに分裂した後の前者の政知に仕えた、という点で「奉公（直属の家臣）の人」にかなう。

『雲玉和歌抄』によれば、父の死後、將軍足利義教の召しにより九歳で上洛、下冷泉持為に預けられ、やがて伏見宮貞常親王の指南役となり三河守に任ぜられた（長谷川千尋氏「宗祇と木戸孝範の交渉――東国時代の年譜考証を中心に――」¹⁰）

という。そして、前掲の松原論文によると、その任国「三河国設楽郡」の名により「志多良」と称されたのではないか、と推測されている。

「志多良」即ち「孝範」とする記録が見出せないのは残念だが、「志多良」が「孝範」である蓋然性は高い。

前掲の永禄八年¹⁵⁶⁵成立の『紹巴抄』での紹巴の言で注目されるのは、紹巴本の属する三条西家本（青表紙本）の流布する以前の本として河内本があり、それを所々校訂した耕雲本が用いられて多くの注釈書が書かれたとされていることである。青表紙本が席巻するようになる少し前までの代表的な『源氏』本は耕雲本としている。このような状況のなか、宗祇は「定家卿御本の御流を床敷思」うこととなり青表紙本に興味を持ち、志多良に「青表紙伝授」をされ、その後的一条禅閣（兼良）に教えを受け、それを実隆に講釈した、と紹巴はいう。

この紹巴の発言は、宗祇が兼良を初めて尋ねたとされる文明元年¹⁴⁶⁹からは約百年を経過しており、必ずしも事実に基づいてはいまい。その中でも看過できないのは、志多良に会って後に兼良に教えを受けた、という紹巴のいう順序であり、これは逆と思う。兼良に入門した後に志多良から教えられ、自身の所持する本が定家本の流れを汲む青表紙本系ではないことを確認し、確認したからこそ、自身の本の青表紙本化に取り組むことになった、ということではなかったか。

それでは宗祇が、志多良である蓋然性の高い孝範に「青表紙伝授」を受けに行ったのが何時なのかは分かるのであろうか。宗祇・肖柏・実隆が『源氏』研究を始めたのは文明五年¹⁴⁷³頃である。次項で述べるように、宗祇手沢本の出来たのが文明六年ころと推測されるので、志多良の教えを受けるために宗祇が尋ねた時期は、文明六年を遡ることはなからう。上野著に『種玉編次抄』からの引用本文二四箇所についての調査があり、大島本との異同数（全九八例）を一八二頁に示しておられ、『種玉編次抄』の本文が非青表紙本である可能性が高いことを一八四頁に結論付けておられる。『種玉編次抄』の成立は文明七年¹⁴⁷⁵十二月であり、その本文が非青表紙本であるならば、宗祇の本はまだ青表紙本化されていない。文明七年一二月時点では、宗祇は青表紙伝授を受けていないと判断される。『源氏物語青表紙』定家流・河内本分別条々』に相当することを伝受されたのは、文明八年以降なのであろう。

前掲の長谷川論文に次のようにある。

宗祇は、少なくとも文明十四年（一四八二）の一度は、関東の地で孝範との再会を果たした。

孝範が志多良であるとして、この文明十四年が志多良に伝受された年であるのかもしれない。この時は、宗祇・肖柏・実隆の三人の共同研究ともなった宗祇の源氏講釈が始まる三年前にあたる。

2 宗祇の本

前項での志多良の検討により、宗祇の最初の『源氏』本は志多良の本から出ていないことが分かり、宗祇の師事した兼良の本であることは確実である。

宗祇の『源氏』研究の出発点となった兼良との交流は、応仁の乱で子の尋尊（興福寺大乘院門跡）を頼って身を寄せていた兼良を成就院に訪ねた文明元年¹⁴⁶⁹七月から始まった。『公記』文明七年¹⁴⁷⁵冬紙背文書、一二月二日、同二五日至二七日裏の宗祇の同年一二月に実隆宛の手紙がある。それによれば、宗祇は実隆から兼良著『源氏和秘抄』（略称『和秘抄』）を何年か借りた末に写本を作っている。『源氏』初学の書であるこの本は、宝徳元年¹⁴⁴⁹の成立であり、この本の成立に先んじる嘉吉三年¹⁴⁴³には兼良は源氏講釈を始めたのではないかとされている^{〔11〕}。

兼良が何本も『源氏』本を持っていた^{〔12〕}にもかかわらず、なぜ講釈のテキストに耕雲本を選んだのだろうか。それは、兼良の所持する耕雲本に対する信頼が高かったからだと推測する。後述するように、兼良耕雲本は禁裏本（原本写）を写した本であり、さらに原本とも校合した本であったからである。

宗祇が兼良に師事し教えを受けるにあたっては、当然、兼良が信頼を寄せる兼良耕雲本が選択されて宗祇本が成ったと推測される。

宗祇が兼良に師事した年月は詳らかではないが、実隆の所持する『和秘抄』を借り、実隆に返したのが文明七年一二月である。前掲の紙背文書によると、『和秘抄』を写す為に筆耕を雇っている。このことから推測すると、最初の宗祇手沢本の作成も人の手を借りてのことであろうので、文明六年頃にはできあがっていたであろう。この手沢本①を用いて文明七年には『種玉編次抄』を著したのである。『種玉編次抄』を著すに当たっての、さらに文明九年七月の帚木講釈をするに当たっての蓄積された成果がこの手沢本に書入られたと推測されるが、文明本の成立を契機に行われた源氏講釈（文明一七年¹⁴⁸⁵閏三月二八日～翌年六月一八日）による書入れも入ったであろう。この本は、源氏講釈の終了後の文明一八年八月の頃に清書的書写により手沢本②が作られる^{〔13〕}まで使用されたようである。新調された手沢本②には、宗祇いうところの青表紙正本との校合（文明一九年¹⁴⁸⁷四月一日）や系図にかかる『源氏』研究の成果が書入れられたであろう。ただし、手沢本③の作成を示唆する記録はなさそうである。

（二）肖柏の本

肖柏は、中院通秀（十輪院内府）の弟であり、『公記』での初出にあたる文明五年正月には既に『源氏』本を所持していたと推測し、これを手沢本①とする。この手沢本①は、当時の『源氏』研究の泰斗であった兼良の講釈の受講時に用いられた本と推測され、宗祇手沢本①とともに兼良本を写したものであったろう。肖柏は、兼良・宗祇による源氏講釈の受講後の文明八年¹⁴⁷⁶五月に『源氏物語聞書』を著したが、同七月中旬から十月上旬にわたり^{〔14〕}『源氏物語聞書』と手沢本①との校合をし、

不一致箇所を解消させたという。この手沢本①は、肖柏の注釈書『源氏物語聞書』の以後の成長に合わせて書入れが増えていったであろうので、手沢本①は、『源氏物語聞書』専用のもので用いられたと考えたい。「七 肖柏本と肖柏古本」で触れているように、肖柏は、『源氏物語聞書』が流布するにつれ貸出用のものを準備し貸し出しており、このことから、『源氏』本についても『源氏物語聞書』に対応していることを重視し、手沢本①は売却せずに『源氏物語聞書』用に保持し続け、第二次『源氏物語聞書』を長享三年¹⁴⁸⁹三月一日に完成させるに到ったと推測する。

既述したとおり、『公記』文明八年¹⁴⁷⁶八月一九日条に肖柏から依頼を受けた実隆の夢浮橋巻の書写記事があり、この頃、書入れによって読みづらくなった手沢本①を清書的書写をした手沢本②が作成されたと推測する。先述したとおり、手沢本①は『源氏物語聞書』専用の本とし、新たな手沢本②は、文明一七年¹⁴⁸⁵閏三月二八日に開始された宗祇の源氏講釈受講用とし、宗祇本化との校合が入ったと推測する。一旦宗祇本化された手沢本②には、宗祇の場合と同様に、この源氏講釈による『源氏』研究の成果が書入れられ、その手沢本を清書的に書写した肖柏手沢本③が文明一八年一〇月頃に作成された⁽¹⁵⁾。宗祇手沢本②の成立に遅れること二ヶ月位のことである。さらに、『公記』明応六年¹⁴⁹⁷十一月二六日条に「肖柏源氏物語新写存念 桐壺巻所望云々 料紙到来 則立筆了」とあることから、手沢本④が作成されたと推測する。肖柏が四本もの手沢本を新調できたと推測するのは、池田氏の庇護や連歌師としての収入により経済的に恵まれていたからであろう。ただし、手沢本③の成立後には手沢本②は売却されたかもしれない。手沢本②を清書的書写された手沢本③があれば事足りるからである。

(三) 実隆の本

実隆の一筆書写により成立した文明本は、宗祇の源氏講釈を受講するにあたって準備された本であり、師である宗祇の本を書写したもの⁽¹⁶⁾であったろうことは既に述べたとおりであり、それは耕雲本（既に、青表紙本化された箇所もあった）を写した宗祇手沢本を写して成立した、と考えている。三人の本文が同一視できるくらいの差しかないそれぞれの手沢本が準備されて、宗祇を師とした講釈を核とした共同研究がスタートしたのである。青表紙本化という本文校訂の側面も持ったであろう共同研究の終了後の青表紙本化のピークを示していると考えられる上臈局本を転写した紅梅本⁽¹⁷⁾、これに先んじた勝仁親王（後柏原天皇）、伏見宮邦高親王（竹園）の書写が行われた文明一八年一〇月ころに青表紙本化の一応の達成をみたと考えてよいであろう。

共同研究を行ったこの間の宗祇・肖柏・実隆の三人の手沢本はその読み取り本文が同一視できるものであったろうが、この共同研究を終了した後は、三人はそれぞれの研究と著述の道を歩むことになる。注目すべきは、受講者として出発した実隆が急速に力を付け、共同研究後は二人の相談に与ることが多くなっていることである。

実隆が共同研究のための手沢本を文明一七年¹⁴⁸⁵に書写し終えて成立した文明本は、売却時（永正三年¹⁵⁰⁶）まで使用されたが、以後、実隆の手沢本は、売却と再生を繰り返し、最後の手沢本である日大本に到った。

三 耕雲本からの脱皮と青表紙本化

ここでは、耕雲本の要素である河内本系の、巻によっては別本系の本

文が、宗祇・肖柏の著書および肖柏本・紅梅本では、それぞれの成立年が下るにしたがって青表紙本系に置き換わっていくことを論じる。

(一) 兼良の耕雲本

宗祇の写したと推測される兼良本は耕雲本であった、そのことを示す記事が、伊井春樹氏著『源氏物語注釈史の研究 室町前期』（桜楓社、一九八〇）一七一頁にあるので引用する。

寛正二年（一四六一）十月五日には、後花園天皇の源氏物語講釈所望の内意が伝えられ（中略）十一月二日から兼良は参内してその任務を果たしている（中略）。当日は関白一条教房・將軍足利義政も聴聞するという榮譽に浴することになった。高松宮家本源氏物語の桐壺巻の奥書によると、甘露寺親長はその頃禁裏に蔵されていた耕雲本を借り出して転写していたようで、宮中においてなのであろう、たまたま講釈のために参内していた兼良と出会ったようである。

同（寛正二年）十一月七日禁裏講釈へ一条太閤／兼良公V持参

此本、一字無相違、

兼良が講釈のために持ち歩いていた本と、親長が書写した本とが一字の相違もなかったという。当時兼良の所持する物語本文は耕雲本であったらしく、それによって講釈の席に臨んでいたようである。

この記事により、兼良所持本の中から講釈に用いた本を耕雲本とし、兼良本を写した宗祇所持本、それを写した実隆の文明本（原態）、宗祇の所持本との校合により同一本文化をはかった肖柏所持本、これら三本

は兼良所持の耕雲本（以下「兼良耕雲本」）酷似の本文を持つ。つまり、三人の『源氏』研究の始発時点では兼良耕雲本（但し、部分的に青表紙本化されていたことを後述する）酷似の本文を持っていた。そしてその元の兼良耕雲本は、寛正二年に甘露寺親長に確認されていたのであった。

(二) 兼良耕雲本の作成

それでは次に、寛正二年に確認された兼良耕雲本について考える。

耕雲本とは、室町中期に耕雲（花山院長親）が將軍足利義持（法号「勝定院顕山道詮」）に献上した写本であり、耕雲本に属する高松宮家本は、松風が青表紙本系、橋姫・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋の七帖が別本系、他は河内本系という取り合わせ本である。耕雲本諸本については上野英子氏の論文がある⁽¹⁸⁾ので、参照させて頂いて次にまとめる。

原本 耕雲（花山院長親）が足利義時（元中三年¹³⁸⁶／至徳三年／応

永三五年¹⁴²⁸）に献上した本。

禁裏本 耕雲本原本を清水谷実秋（？／応永二七年¹⁴²⁰）が書写した本。

注書は耕雲と栄雅、跋歌と奥書は耕雲が担当。応仁の乱で焼失

写本 甘露寺親長により次に示す①②③④の四本が書写された。①

②④は全帖を書写。③の各筆の高松宮家本では紅葉賀を担当。

①寛正書写本（寛正一年¹⁴⁶⁰／六年¹⁴⁶⁵）全帖

書本は清水谷実秋（？／応永二七年¹⁴²⁰）書写の禁裏本

②文明書写本（文明一一年¹⁴⁷⁹一七年¹⁴⁸⁵）全帖

書本は①寛正書写本を書写した徳大寺実淳本

③長享書写本（長享二年¹⁴⁸⁸）紅葉賀を親長が担当（松風は実隆が担当）

書本は①寛正書写本を書写した徳大寺実淳本

④延徳書写本（延徳三年¹⁴⁹¹）全帖

書本は①寛正書写本の滯標・蓬生・薄雲および②文明書写本

耕雲本原本の所蔵変更についてはすぐ後に触れるが、能書で知られた清水谷実秋（？）応永二七年¹⁴²⁰）が書写した本が禁裏本となっていた。親長は、禁裏本全帖をまず寛正年間（1460～1465）に書写したが、前掲の伊井著からの引用文では兼良の所持本は寛正二年¹⁴⁶¹十一月七日時点で耕雲本であると確認できる本文であった。兼良耕雲本は、親長が①を作成中に耕雲本と確認されたのだから、兼良が①を書写するのは不可能であり、その書本は原本または禁裏本ということになる。

ところで、『看聞御記』嘉吉三年¹⁴⁴³八月二三日条に次のようにある¹⁹⁾。

（前略）一條殿以茂成朝臣被申 源氏有校合事 禁裏御本申出之所他所^ニ被預置也 一本伏見殿ニ被預申之由被仰下 校合之為申出度之由被申 禁裏御本預置了 被伺申之上者不可有子細 可進之由返事申了 此御本兼拜見了 殊勝御本也 勝定院旧院へ被進之由茂成朝臣^ニ被語之由申（後略）

当時の禁裏には、もとの禁裏本と新たな禁裏本（義持が旧院に進上した

原本）の二本があり、もとの禁裏本は某家に預けられており、兼良は伏見宮家に預けられた原本（勝定院本）と校合したのである。兼良は原本の写しである禁裏本を写したからこそ原本との校合を企図したのである。『兼良耕雲本』はもとの禁裏本を写したものはあるが、原本との校合でさらに原本に近づいた本文となったのである。

（三）焼失を免れた兼良耕雲本

次に、宗祇の写した本が兼良耕雲本と同じ本なのかを確認したい。

兼良は応仁元年¹⁴⁶⁷一月、関白に還補した。しかし同年五月に応仁の乱が勃発、一条室町の邸宅と書庫「桃花坊文庫」が焼失した。ただし、この火災の際は兼良耕雲本は焼失を免れたであろう。応仁二年¹⁴⁶⁸八月、奈良興福寺大乘院へ門跡の尋尊（子息）を頼って身を寄せたが、そこでも講義・著作を続け、『花鳥余情』を完成させているので、『源氏』関係の資料は、常に身近に置き、持ち出せる状態であったと推測されるからである。兼良は、京から移した物のうち当座使用しないものは山奥の長谷寺へ預けており、この折々の用心深さが『源氏』関係資料を焼失から救ったであろう²⁰⁾。兼良耕雲本は無事に兼良に所持されていたと推測される。やはり、宗祇が写した本は、兼良耕雲本としてよさそうである。

（四）河内本系本文・別本系本文から青表紙本文へ

耕雲本・肖柏著『源氏物語聞書』・宗祇著『紫塵愚抄』・西家本系での到達点としての紅梅本²¹⁾・肖柏ゆかりの本であろう肖柏本これらを比較して本文の流れを見るために、桐壺巻を調査する。なお、耕雲本は『大成』の高松宮家本に依る。『和秘抄』は国文研究資料館初雁文庫蔵本に

よるが肥前島原松平文庫蔵本と校異のないものを本文とした。『源氏物語聞書』は肥前島原松平文庫蔵本（表題は『弄花抄』請求番号385―16―2）によるが初雁文庫本七冊本（表題は『弄花抄』請求番号12―556―1）とに校異のないものを、『紫塵愚抄』は宮内庁書陵部本によるが初雁文庫本と校異のないものをその本文とした。肖柏本・紅梅本は写真版による。次表での箇所は、耕雲本が河内本系である箇所、耕雲本と肖柏本に校異がある箇所、前二者に対応する各著作の本文がある箇所を挙げた。な

お、本文に冠した符号「B」は河内本本文、「b」はBと同系の本文、「A」は青表紙本本文、「a」はAと同系の本文、「C」は別本本文、「c」はCと同系の本文、「?」は『大成』に見られない本文であることを示している。なお、表中のブロック体は、耕雲本が「B」本文の箇所であることを示している。表の末尾に付した集計は、耕雲本が「B」であるもののみの集計になっている。

「B本文からA本文への流れ一覧」

依拠資料『大成』		初雁＋肥前松平	書陵部＋初雁	肥前松平七冊＋初雁七冊	写真版	写真版
No	大成 頁行	源氏和秘抄149年	紫塵愚抄1488年以前	肖柏著源氏物語聞書1489年か	紅梅本(日本同文)1495年	肖柏本1497年以後か
1	5①	Bたまふ	A給ひける		A給ける	A給ける
2	5④	A人の心をのみ	a人の心を		a人の心を	a人の心を
3	5⑤	Aあつしく	?あつしう	Aあつしく	Aあつしく	Aあつしく
4	5⑥	Aおもほして	aおもほして		aおもほ、して	aおもほ、して
5	5⑥	Bはゝからせ	Aえはゝからせ		Aえはゝからせ	Aえはゝからせ
6	7③	Bおほむさうし		A御つほね	A御つほね	A御つほね
7	7⑥	Bわたとの	Bわた殿		Bわた殿	B渡殿
8	9④	Bきえつゝ	Aたえつゝ		Aたえつゝ	Aたえつゝ
9	9⑥	Bすほうともあまたはしむ へきよしなど		Aけふはしむへきいのりとも	Aけふはしむへきいのり とも	Aけふはしむへきいのり とも
10	9⑫	Aおほしたらす		Aおほしたらす	aおもほしたらす	aおもほしたゝす
11	10⑧	Bみつのくらゐ	?おほきみつの位	A三位のくらゐ	A三位のくらゐ	A三位のくらゐ

32	15 ⑤	Bすゝしくふきて		Bすゝしく吹て		Bすゝしく吹て	Bすゝしく吹て
31	14 ⑭	Bとゝめし	Bとゝめし		Aあらし	Aあらし	Aあらし
30	14 ⑬	B人の心			A人の心を	A人の心を	A人の心を
29	13 ⑤	Bおもひこそやれなと	Aおもひこそやれと		A思ひこそやれと	A思ひこそやれと	A思こそやれと
28	12 ⑨	B給てかひなき御物かたり をたにとなむ	A給なんや		A給なんや		Aたまひなむや
27	12 ⑨	Bしのひて	A忍ては		Aしのひては		Aしのひては
26	12 ⑧	Bさむへきよなく	Aさむへきかたなく		Aさむへきかたなく		Aさむへき方なく
25	12 ⑧	A思ひしつまるにしも	?思ひしつむるにしも		Aおもひしつまるにしも		A思しつまるにしも
24	12 ②	Aは、君もとみに	Cは、君とみに		Aは、君もとみに		Aは、君もとみに
23	11 ⑭	Aふし、つみ給へるほど	aふし給へるほどに		aふし給へる程に		Aふししつみ給へる程に
22	11 ⑭	Bくれやみにて	Aやみにくれて		Aやみにくれて		Aやみにくれて
21	11 ⑭	Bすくし給へるを	a過し給ひつるを		aすくし給つるを		aすくし給つるを
20	11 ⑨	Bゆふつくよ	A夕月夜の		Aゆふつく夜の		A夕つく夜の
19	11 ⑧	Bゆけいの命婦を	Aゆけひの命ふといふを		Aゆけひの命婦といふを		Aゆけひの命婦といふを
18	11 ⑦	Bはたさむき	Aにはかにはたさむき		Aにはかにはたさむき		Aにはかにはたさむき
17	11 ⑥	Bしたしくさふらふ		Aしたしき	Aしたしき		Aしたしき
16	11 ②	A御とのゐ	Cとのゐ「麦」		A御とのゐ		A御とのゐ
15	11 ②	Bこひしく	Aかなしう		Aかなしう		Aかなしう
14	11 ②	Aせむ方なう	?せんかたなく		Aせむかたなう		Aせん方なう
13	10 ⑫	B心はせも		A心はせの	A心はせの		A心はせの
12	10 ⑩	Bいまひときはをたにとて		?いまひときさみをたにと	Aいまひときさみのくら ゐをたにと		Aいまひときさみのくら ゐをたにと

33	15⑤	B たちはなれかたき		B 立はなれかたき		A たちはなれにくき	A たちはなれにくき
34	16③	B おほとのもらすまちは はしましけるをいと		？おほとのもりさりけるを	？おほとのもらせ給は さりけるを	？おほとのもらせ給は さりけるを	？おほとのもらせ給は さりけるを
35	16⑥	B 長恨歌のゑ	B ちやうこむかのゑ	A 長恨歌の御絵	A 長恨歌の御ゑ	A 長恨歌の御ゑ	A 長恨歌の御ゑ
36	16⑥	A 亭子院のか、せ給て	？ていしの院か、せ 給て	A 亭子院のか、せ給て	A 亭子院のか、せ給て	A 亭子院のか、せ給て	A 亭子院のか、せ給て
37	17⑥	A おもほすも	？おほすも	A おもほすも	A おもほすも	A おもほすも	A おもほすも
38	17⑨	B 大液芙蓉	A たいゑきのふよう ひやうの柳	A 大液のふよう未央の柳	A 大液の芙蓉未央の柳	A 大液の芙蓉未央の柳	A 大液の芙蓉未央の柳
39	17⑨	B からめいたりけん	B からめいたりけん	A からめいたる	A からめいたる	A からめいたる	A からめいたる
40	17⑩	B うるはしうけふらにこそ	B けふら	A うるはしうこそ	A うるはしうこそ	A うるはしうこそ	A うるはしうこそ
41	17⑩	B らうたけなりしありさま は	B らうたけなりし	A らうたけなりしを	A らうたけなりしを	A らうたけなりしを	A らうたけなりしを
42	17⑩	B をみなへしの風になひき たるよりもなよひ	B なよひ	A ナシ	A ナシ	A ナシ	A ナシ
43	18⑦	A あくるもしらて	？あくるもしらす	A あくるもしらて	A あくるもしらて	A あくるもしらて	A あくるもしらて
44	18⑧	B おこたり給ひぬ	C おこたりぬ	A おこたせたまひぬ	A おこたせ給ひぬ	A おこたせ給ひぬ	A おこたせ給ひぬ
45	19③	B いとゝゆゝしう	A いとゆゝしう	A いとゆゝしう	A いとゆゝしう	A いとゆゝしう	A いとゆゝしう
46	19⑥	B かのおは北の方	B 彼おは北のかた	A かのおは北のかた	A かのおは北のかた	A かのおは北の方	A かのおは北の方
47	19⑪	B 御ふみはしめ	A ふみはしめ	A ふみはしめ	A ふみはしめ	A ふみはしめ	A ふみはしめ
48	20⑤	B ことゝしうそら事にそ	A ことゝしううたてそ	A ことゝしうゝたてそ	A ことゝしうゝたてそ	A ことゝしううたてそ	A ことゝしううたてそ
49	20⑪	B そのかた	A そなた	A そなた	A そなた	A そなた	A そなた
50	20⑫	B たすくへき	A たすくる	A たすくる	A たすくる	A たすくる	A たすくる
51	20⑭	B かへりなん	A かへりさりなん	A かへりさりなん	A かへりさりなん	A かへりさりなむ	A かへりさりなむ

その他の数	0	1	1	2	「*の数」とは耕雲本のBの項目に対する項目数	
その他の率		(1÷18) 5・6%	(1÷21) 4・8%	(2÷13) 15・4%	／	／
A・aの数	0	3	17 (うちNo.21は0.5扱)	11	47 (No.21・34は0.5扱)	47 (No.21・34は0.5扱)
A系の一致率		(3÷18) 16・7%	(16.5÷21) 78・6%	(11÷13) 84・6%	(46÷50) 92・0%	(46÷50) 92・0%
B・bの数	50	14	3	0	3	3
B系の一致率	50 (100%)	(14÷18) 77・8%	(3÷21) 14・3%	0	(3÷50) 6・0%	(3÷50) 6・0%
河内本系(B)項目数	50 (100%)	*の数18 (100%)	*の数21 (100%)	*の数13 (100%)	*の数50 (100%)	*の数50 (100%)
65 28②	Bもくすりたくみ(つかさ などに)	Bもくすりたくみ (つかさなどに)			A修理職たくみ(つかさ に)	A修理職たくみ(つかさ に)
64 27⑥	Bこゝらみるよにありか	Bこゝら			Aにる人なくも	Aにる人なくも
63 26⑪	Aにけなく	aにけなう			Aにけなく	Aにけなく
62 26⑩	A女きみはすこしすくし給 へる	?女君はすこしすき 給へる		?女君はすこし給へる	A女君はすこしすくし給 へる	A女君はすこしすくし給 へる
61 26②	Bおとろかさせ		Bおとろかさせ		Bおとろかさせ	Bおとろかさせ
60 26①	Bむすひこめつやと		Aむすひこめつや		Aむすひこめつや	Aむすひこめつや
59 25⑬	Bろくの物		A御ろくの物		A御ろくの物	A御ろくの物
58 24⑪	B御いしたてゝ	B御いしたてゝ			Aいしたてゝ	Aいしたてゝ
57 24⑦	Bおほしいたつき	Bおほしいたつき			Aおほしいとなみて	Aおほしいとなみて
56 24⑥	Bみかたよろつにゐたちて	Aゐたち			Aゐたち	Aゐたち
55 23⑤	Bさけさせたまはぬ(程に)	Bさけさせたまはぬ (程に)			Aさり給はぬ(をまして)	Aさり給はぬ(をまして)
54 23④	Aこよなう		Aこよなう		aこよなく	aこよなく
53 22⑬	B兵部卿の宮			A兵部卿のみこ	A兵部卿のみこ	A兵部卿のみこ
52 22⑦	B御かたち			A御かたち人	A御かたち人	A御かたち人

耕雲本の桐壺は河内本系(B)であり、この表に挙げたBの箇所は五〇箇所ある。そして、この五〇箇所以外は、他の著書の箇所に対応する耕雲本ということで一五箇所加えてある。この一五箇所は青表紙本系(A)であり、合計六五箇所の表となっている。ただし、集計は先述したとおりブロック体で表示した五〇箇所について行い、a・bについてはA・Bの半分の0.5として計算している。

まず兼良著『和秘抄』から見る。No.63の耕雲本「にけなく」が『和秘抄』では「にけなう」と音便化されているのは、No.3耕雲本「あつしく」が『和秘抄』では未詳本文「あつしう」になっていることを考えると、ともに不注意な引用態度を読み取るべきか。No.11「おほきみつの位」は御物本との校合で得られる「おほきみみつの位」の「み」の誤脱本文のようだ。No.36「ていしの院か、せ給て」は耕雲本にはなかった「の」が『和秘抄』では加えられ読みを示したようだ。No.62「…すき…」は耕雲本の「…すくし…」の解釈本文となっており、などと誤写が疑われる箇所や忠実に写さないものが見られる。どうやら兼良の引用も厳密さに欠けるようである。No.38・45・56の『和秘抄』が既に青表紙本化されていることを考えれば、兼良耕雲本にも校訂のための書入れもあったであろう。『和秘抄』一八箇所で耕雲本と一致するB本文の箇所は一四箇所に止まり、B系の本文である率は約七七・八%である。

『紫塵愚抄』には、B系の本文がまだ約一四・三%も残っている。宗祇が解説に重きを置き、引用本文にはあまり意に介さない人物である⁽²²⁾のに、耕雲本との一致、約一四%は存外多いという感触を受ける。さらにNo.3の「あつしう」は、『和秘抄』を確認するまでは典拠不明の本文と認識してきたが、この「あつしう」は『和秘抄』の「あつしう」が淵

源であるようだ。宗祇の『紫塵愚抄』には兼良耕雲本の本文と、『和秘抄』の本文が確かに受け継がれている。

肖柏著『源氏物語聞書』については、ほとんどが青表紙本化されているなか、『大成』に見られない本文が一三箇所中四箇所もあり、肖柏の引用も厳密さに欠けるのであろうか。注目すべきは、青表紙本化に押され耕雲本の本文の残存率が約〇%にまで減少していることである。肖柏の手沢本が、文明八年¹⁴⁷⁶新写の手沢本②から文明一八年¹⁴⁸⁶新写の手沢本③へと変わるにつれ青表紙本化が進行したのであることが、『源氏物語聞書』のA系の本文が約八四・六%まで増加していることから推測される。

第一次『源氏物語聞書』が文明八年¹⁴⁷⁶に成立した直後、肖柏は物語本文と『源氏物語聞書』との本文の一致を図って校合をしたが、永正七年¹⁵¹⁰に成立した第二次『源氏物語聞書』にいたるまでの長きにわたり手が加えられ実隆著『弄花抄』となったことを考えると、肖柏著『源氏物語聞書』としてここに挙げた本文は、文明八年当初のものには該当しないのであろう。それでは、いつ頃の本文と考えればよいのであろうか。

宗祇著『紫塵愚抄』の成立が長享二年¹⁴⁸⁸以前とされていて⁽²³⁾、B系の本文との一致が一四・三%であり、A系の本文との一致率が七八・六%になっている。『源氏物語聞書』は、B本文との一致が〇%に減少していること、およびA系の本文の一致率が八四・六%であることから判断して、『源氏物語聞書』の本文は『紫塵愚抄』以後のものであり、紅梅本のA系の本文との一致率が九二・〇%であることから、『源氏物語聞書』の本文は紅梅本の成立以前のものである。以上から判断して、『源氏物語聞書』の本文は肖柏が第二次本を作った長享三年¹⁴⁸⁹ころのものと

推測する。

注(1) 所載の上野英子氏著(以下、「上野著」)で述べられているとおり、西家本諸本の中で青表紙本化の達成度が随一であるのは紅梅本であり、A本文と一致する率は九二・〇%である。『大成』に青表紙系の一本とされている肖柏本五〇巻のなかに桐壺も含まれている。この桐壺の調査では、肖柏本・日大本もA本文との一致率は同じである。肖柏本については、肖柏という人物との関係が未だに詳らかではないが、日大本との親近は衆目の認めるところであり、ここでの調査でも日大本に近い。この耕雲本のB本文からA本文への流れを見た五〇箇所では、日大本と紅梅本とが同文であるので、紅梅本から日大本への本文の流れにときに見られる青表紙本化の後退現象が見られないが、他の巻ではどうなっているか。まだまだ調査すべきことが残されている。

以上の桐壺の調査で分かったのは、宗祇の師事した兼良の所持本(兼良耕雲本)の本文が、『和秘抄』の引用本文に、また、兼良耕雲本を受容した宗祇の手沢本を通して、『紫塵愚書』の本文に見られることである。ただし、耕雲本のB本文は、時が経過して成立した著書ではA本文へと置き換わっている。つまり宗祇・肖柏・実隆の青表紙本化の努力の蓄積が、B本文の減少とA本文の増加として具現している。三人の『源氏』研究の出発点には兼良耕雲本の本文(ただし、青表紙本化された箇所もある)があった。しかし、その本文は時の経過とともに青表紙本系本文へと置き換わっていったのである。

(五) 耕雲本の奥書及び跋歌

ところで、兼良耕雲本を写したと推測した宗祇手沢本①、肖柏手沢本

①、宗祇手沢本①を写した文明本の三本は、耕雲本の特徴といえる奥書と跋歌も持っていたのであろうか。これについては、三本ともに伝存していないので確認できないことはあるが、おそらくは持っていたと想像する。なぜならば、師の本である書本に存在したものを写さずに省略するという書写態度は不敬であり、ありえないことだからである。

一方、今日まで伝存している日大本・肖柏本には耕雲本の本奥書および跋歌はない。これは、書写が重ねられる途中で奥書および跋歌を写さなくなったからであろう。

写さずに済ませたのが何時かと考えれば、それは、耕雲本の本文から脱し青表紙本化が出来たと実隆らが確信できた時点以後の清書書写による新写本作りにおいてであろう。既に耕雲本ではなくなってしまった新写本に耕雲本の本奥書および跋歌は不要であるからである。

宗祇手沢本②、肖柏手沢本③、文明本を売却後の永正三年閏十一月二一日に作成されたB本⁽²⁴⁾には、もうこの本奥書および跋歌はなかったであろう。あるいは、別冊仕立てで写された⁽²⁵⁾可能性は残るけれども。

四 肖柏著『源語花錦抄』の検討

肖柏は、文明本の成立時から六年あまり経過した延徳三¹⁴⁹¹年五月末に『源語花錦抄』(略称『花錦抄』)を完成させている。この時から四年余りして、上藤局本(一筆本)が書写了となっているので、肖柏が『花錦抄』を執筆した時と上藤局が書入文明本を書写し始めた時が重なっていると推測される。

『花錦抄』は、神宮文庫本と桃園文庫本の写本が知られていたが、幸

いにも自筆本も存在している。京都女子大学蔵本であり、清水克彦氏の解説付き影印および翻刻がある⁽²⁶⁾ので影印を用い調査をする。

肖柏は、該書で『源氏』の三五の巻から抄出し、簡単な解説を付している。抄出文が肖柏の本のその頃の本文を反映している可能性がある。よって、肖柏の本の変遷を知る助けになることが期待される。

まず、『花錦抄』の本文の位置を見るために、耕雲本・紅梅本・肖柏本を比較する。校異をとる際は、書入後をその本の本文とし、「を・ほ」

「漢字・仮名」などの類の表記差を無視する。なお、『花錦抄』に引用された本文を中程の欄に『大成』所載本との校異のあることに校異箇所に対応する耕雲本の本文を掲げ、『花錦抄』の本文の下部に紅梅本を置き、さらに下部に肖柏本を配したが、一続きの抄出文であっても、校異ごとに別Noを付したため、全五七箇所を表となっている。ただし、集計はブロック体で表示した耕雲本が「B」又は「C」の箇所のみとなっている。この表も、前掲の「B本文からA本文への流れ一覧」に準じて作成する。

『花錦抄』のB本文からA本文への流れ一覧

No.	頁行巻名	資料		紅梅本 (写真版) (上藤局本1495年)	肖柏本 (帚木・野分は写真版、他は『大成』) 1497年以降か
		耕雲本 (『大成』高松宮家本*)	『花錦抄』(写真版) 1491年		
1	27 ⑩ 桐壺	B きゝかよひ	? きゝかはし	B	B きゝかよひ
2	27 ⑩ 桐壺	B 御けはひはかりを	B 御けはひはかりを	A	A 御こゑを
3	73 ① 帚木	B なに心もなき	A なに心なき	A	A なに心なき
4	73 ② 帚木	B 人から所からの	A 人から	A	A 人から
5	101 ⑪ 夕顔	B いつこを	A いつこか	A	A いつこか
6	174 ④ 若紫	B とらまほしくおほえ給へと	? とらまほしくおほさるれと	A	A とらまほしけなれと
7	174 ⑤ 若紫	A あさましう	? あさましく	A	A あさましう
8	278 ⑫ 花宴	B まとはましやは	A まよはましやは	A	A まよはましやは
9	287 ⑩ 葵	A さゝのくまにたに	A さゝのくまにたに	A	A さゝのくまにたに
10	288 ② 葵	A かけをのみ	? かけをたに	A	A かけをのみ
11	417 ⑩ 須磨	A 浦人のしほくむ袖に	A 浦人のしほくむ袖に	A	A 浦人のしほくむ袖に

33	1064 ⑨ 若菜上	Bにはまほしけれ	Aにはまほしけれな	A (熊による)	Aにはまほしけれな
32	979 ⑧ 梅枝	Aおもひきえ	A思ひきえ	A	Aおもひきえ
31	979 ⑧ 梅枝	Aけふりをさへ	Aけふりをさへ	A	Aけふりをさへ
30	979 ⑧ 梅枝	Aかす／＼にも	C数／＼にしも	A	Aかす／＼にも
29	945 ⑥ 真木柱	A立とまり給ても御心の…	Aたちとまりたまひても御心の…	A	A立とまり給ても御心の…
28	873 ⑦ 野分	Aおほかたに	?大かたの	A	Aおほかたに
27	868 ⑫ 野分	B日のやう／＼	A日のわつかに	A	A日のわつかに
26	809 ⑭ 蛭	Bほとゝきす	B郭公	Aほとゝきすなど	Bほとゝきす
25	740 ⑥ 玉鬘	Bはつせ河とは	Aはつせ川と	A	Aはつせ川と
24	740 ⑥ 玉鬘	Bゆく水を	Bゆく水を	A	Aゆく水をは
23	672 ③ 少女	A心さしの	a心さし	A	A心さしの
22	672 ③ 少女	Bならし給ふへき	Aならしたまふ	A	Aならし給
21	672 ② 少女	Aゑい花にのみ	Aゑいくわにのみ	A	Aゑい花にのみ
20	672 ② 少女	Aせかい	Cせけん	A	Aせかい
19	643 ⑩ 朝顔	Aかれたる花ともの	Aかれたる花ともの	A	Aかれたる花ともの
18	594 ⑫ 松風	Aつとにして	Aつとにして	A	Aつとにして
17	594 ⑪ 松風	Aきんたち	A君たち	A	A君たち
16	510 ⑫ 滯標	Bかねのこゑ／＼	?こゑ	A	Aこゑ／＼
15	510 ⑪ 滯標	Bしもわたりの京こく	Aしもつかたのきやうこくわたり	A	Aしもつかたの京極わたり
14	465 ④ 明石	Aむつことをかたりあはせむ	Aむつことをかたりあはせん	A	Aむつことをかたりあはせむ
13	464 ⑧ 明石	B気色ことに	?けしはかり	A	Aけしきはかり
12	429 ③ 須磨	Bうら千鳥あはれに	Aちとりいと哀に	A	A千とりいとあはれに

53	1682 ③早蕨	Aとこ世にて	Bとこ世に	A	Aとこ世にて
52	1682 ③早蕨	Aみすてんことも	Aみすてんことも	A	Aみすてんことも
51	1682 ③早蕨	Aみねのかすみのたつを	Aみねの霞のたつを	A	Aみねのかすみのたつを
50	1682 ②早蕨	Aのこりゆかしく	Aのこりゆかしく	A	Aのこりゆかしく
49	1682 ②早蕨	Aはなの木ともの	A花の木ともの	A	Aはなの木ともの
48	1562 ⑪椎本	Aあらそひおつるこのはをとも水のひゝきも涙のたきもひとつものゝやうにくれまとひて	?あらそひおつる木葉の音も水のひゝきもひとつものゝやうにおほされて	A	Aあらそひおつるこのはをとも水のひゝきも涙のたきもひとつものゝやうにくれまとひて
47	1562 ⑪椎本	aもとをしかに	aもよほしかにて	A	Aもよをしかに
46	1562 ⑪椎本	Aましてそての	Aまして袖の	A	Aましてそての
45	1562 ⑪椎本	B山のけしき	A野山のけしき	A	Aの山のけしき
44	1521 ①橋姫	Cかくれなき御にほひをひかせにつきて	Aかくれなき御匂そ風にしたかひて	A	Aかくれつるにかくれなき御にほひそ風にしたかひて
43	1436 ③匂宮	A春さめのしづくにも	a春の雨のしづくにも	A	A春さめのしづくにも
42	1436 ②匂宮	Bはかなく袖かけ給ふ	Bはかなく袖かけたまふ	B	Bはかなく袖かけ給ふ
41	1419 ②幻	Aよそにみて	Cよそにして	A	Aよそにみて
40	1418 ⑬幻	B星逢みるほとみなし	Aほし合みる人もなし	A	A星逢みる人もなし
39	1388 ⑥御法	Aさるは身にしむ許	Aさるは身にしむはかり	A	Aさるは身にしむ許
38	1346 ②夕霧	A鹿はたゝまかきのもとに	A鹿はたゝまかきのもとに	A	A鹿はたゝまかきのもとに
37	1232 ⑩柏木	Aゆくゑなきそらのけふり	Aゆくゑなき空のけふり	A	Aゆくゑなきそらのけふり
36	1113 ⑪若菜上	A色くこほれ出たるみすのつまく	A色くこほれ出たるみすのつまく	A (熊による)	A色くこほれ出たるみすのつまく
35	1064 ⑩若菜上	Aあらまし	Bあらまほし	A (熊による)	Aあらまし
34	1064 ⑩若菜上	A心わくる	A心わくる	a (熊による)	a心わく

54 1722 ⑧宿木	C 思ふに	A おもふにさらに	A	A 思ふにさらに
55 1922 ⑤浮舟	A かへり給ほと…かゝらぬ山もなくくそゆく	A かへりたまふほと…かゝらぬ山もなくくそゆく	A	A かへり給ほと…かゝらぬ山もなくくそゆく
56 1993 ④手習	C 山になくしか人に	A 山に鳴鹿をたに人に	A	A 山になくしかをたに人に
57 1993 ⑤手習	a しなむとするをみつ、	a しなむとするをみつ、	a	a しなむとするをみつ、
耕雲本の B・C 項目数	23 (100%)	耕雲本の B・C 項目数 23 (100%)	23	23 (100%)
一致率 B・C と同文	／	花錦抄の B・C 項目数 3 (4 ÷ 28) 19・4%	2 (8・7%)	3 (13・0%)
一致率 A・a の数	／	花錦抄の A・a 項目数 14 (15 ÷ 23) 65・2%	21 (91・3%)	20 (87・0%)
不詳本文	／	(4 ÷ 23) 17・4%	0	0

* 高松宮家本(耕雲本)は、松風のみが青表紙本系であり、残る五二帖のうち、橋姫・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋の七帖が別本系統(C)、以上の他の帖は河内本系統(B)である。

『花錦抄』五七箇所に対応する耕雲本のうち、BおよびC系統本文は二三箇所ある。このブロック体で示した耕雲本二三箇所を起点とする箇所のみを集計すると、『花錦抄』の一五箇所がAで、これは二三箇所内の約六五・二%にあたり、四箇所がBで二三箇所内の一七・四%にあたる。「三 耕雲本からの脱皮と青表紙本化」での調査は桐壺を対象としたものであったので巻々から抄出した『花錦抄』とは異なるのを懸念しつつも、BおよびC本文との一致率とA本文との一致率から『花錦抄』の位置を探ってみることにする。

A系本文との一致率六五・二%からは『花錦抄』の位置は「あ」であり、BおよびC本文との一致率一七・四%からは『花錦抄』の位置は「い」である。『花錦抄』の本文上の位置は、A本文の一致率の位置「あ」と

B本文の一致率の位置「い」から、比較的『紫塵愚抄』に近いといえる。そして、成立年の延徳三年¹⁴⁹¹からは、その位置は「う」あたりである。『花錦抄』成立当時の本文であろうと推測していたが、ズレがある。延徳三年成立というのは動かないので、書本が以前の手沢本を使用して『花錦抄』を著述したことでズレが生じているのではなからうか。思い巡らせば、肖柏は手沢本①を『源氏物語聞書』専用に用いた、と推測した。肖柏本桐壺のA本文との一致率は九二・〇%であったが、『花錦抄』は八七・〇%である。研究上の著述でないもので、以前の手沢本で気楽に著述したのではなからうか。ただし、No. 19・28・33・39・51では耕雲本がAであるにもかかわらず、『花錦抄』が河内本系や別本系本文であり、ズレの原因として誤写を疑うべきかもしれない。

【花錦抄の位置】

A系65.2% B・C系17.4% う(花錦抄の成立1491年)	←	あ	い	う	和秘抄1449	B・C系一致率 77.8%	A系一致率 16.7%	その他 5.6%
					紫塵愚抄1488以前	18.4%	73.7%	5.3%
					源氏聞書1489	3.85%	84.6%	7.7%
					紅梅本*1495 肖柏本	7.3%	90.6%	/

*成立年は紅梅本の親本のものである。

五 校合本「正徹本源氏物語」

三人共同の『源氏』研究において青表紙本化のための校合に使用された本は、どの本であったのか。これについては真つ先に名を挙げるべきは、正徹本『源氏物語』（以下、「正徹本」）であろう。

正徹の死去した長祿三年¹⁴⁵⁹に実隆はまだ五歳であった。正徹の蔵書がその没後にどうなったかは不詳ではあるが、実隆四一歳時の『公記』明応四年¹⁴⁹⁵八月一日条に正徹本の名が出てくる。次に、途中から引用する。

先日太閤相国よりも被申候子細候處 折節無御出頭候之間万端無興候き 抑勅撰内少々沽却候らん 先々令祝著候 早々被召寄被仰合候て 給者可為本望候 源氏も青表紙小形候 銘筆招月候 花宴一冊新写同 招月筆候 同先々被召寄候て 他所へ遣候はすは可為本望候（後略）

この記事は、実隆が徳大寺実淳から受け取った手紙を紙背用紙として使わず、記録としてそのまま日記に挿入したものと推測される。

(二) 徳大寺実淳

宮川葉子著『三条西実隆と古典学』（風間書房、一九九五）七六頁に

八月。一日、先般罹災した実淳が焼け残った文書売却を相談しに来た。その中には正徹銘の「青表紙小形」源氏物語や、正徹書写の花の宴があつたという（以下、別事の記事に移る）。

と書かれている（²⁷）。

この手紙の書かれた直前の明応四年¹⁴⁹⁵七月二八日に徳大寺実淳（文安二¹⁴⁴⁵）天文二¹⁵³³）が火事に見舞われたことが、桃園文庫『源氏物語揚名介秘説』の奥書からも判明する。実淳は邸宅再建のための資金を得るためか、焼け残った蔵書の中から売却しよう、ということのようである。

実淳は、耕雲本の寛正書写本を書写して実淳本をものにし、その実淳本は文明書写本・長享書写本のそれぞれの書本となり、さらに延徳書写本も五一帖が実淳本を書写した文明書写本であつた、ということ、耕雲本の伝来に大きく寄与した人物である（ちなみに、売却予定の書目の中に耕雲本はないようである）。

実隆との関わりは、『公記』文明一六年¹⁴⁸⁴十一月七日条に実淳のため『後撰集』の書写を始めたこと、同一七年¹⁴⁸⁵六月二三日条に宗祇の帚木講釈を実隆の企画により実淳邸で催したこと、同一八年¹⁴⁸⁶一〇月一日条に信濃から到来の柿を実淳に分け届けたこと等が見られ、文学面での

交際のみならず日常的にも相当親しい交わりをしていたようである。そういう親しい仲なので、実隆に蔵書売却の相談をするのであろう。

(二) 正徹本

前掲の手紙で注目すべきは、売却予定の本の中に、正徹本があることである。

正徹（永徳二年¹³⁸¹→長祿三年¹⁴⁵⁹）は、足利六代將軍義政に嫌われ謫居するも、その没後は歌壇に復帰し活躍、八代將軍義政に『源氏』を教えたという。

実淳は、正徹没時の長祿三年¹⁴⁵⁹に一五歳であり、正徹本の売却を考える明応四年¹⁴⁹⁵時は五一歳。この間ずっと正徹本が徳大寺家にあったかは不明ながら、宗祇・肖柏・実隆の三人が共同研究をした文明一七年¹⁴⁸⁵・一八年のころには徳大寺家に蔵されていたのであろう。しかも実淳は三人の共同研究が行われるのを知って、該書の本文が定家の青表紙本にまで廻れると奥書に書く正徹本を実隆に貸し出したのではなかろうか。実隆たちの共同研究が始まった文明一七年閏三月二十八日から約三ヶ月後の『公記』六月二三日条に実淳邸での宗祇の帚木講釈の記事がある。これは、正徹本を貸し出してくれた実淳に花を持たせる企画ではなかったか。

宗祇の講釈を聴聞した人々はその素晴らしさに感嘆して注釈書を所望し、七月早々には宗祇著『雨夜談抄』をものしたということで、この企画は大成であったといえる。なお、『雨夜談抄』の引用本文については「青表紙本系ではあるものの、やはり傷の多い本文だったようである」（上野著一八八頁）と結論付けておられる。『種玉編次抄』での非青表紙系から『雨夜談抄』での青表紙本化に正徹本が寄与したことが推測され

る。

そして、共同研究が終わる文明一八年六月一八日の後には正徹本の返却があったと推測する。『公記』に正徹本の借り出しおよび返却の記事を見いだせないのは残念ではあるが、同年一〇月一日条に、信濃から到来の柿のうちから実淳に届けている記事がある。実淳への感謝の思いが取らせた行動といえようか。

さて、加藤洋介氏は、「室町期の源氏物語本文―三条西家本と正徹本と」⁽²⁸⁾において、正徹本が「肖柏本・三条西家本と非常に近い関係にある」と結論付けられた。加藤氏のこの結論は、三人の共同研究に使用された本が正徹本であったことを示している。もし、宗祇の本も残っているならば、その本も肖柏本・日大本と近いはず、と推測され、宗祇の本が埋もれてしまっているようであるのが残念である。

(三) 正徹本の受容

三人の共同研究において正徹本との校合が行われたとしたが、その校合は、一挙になされたのではなく、取り上げる巻ごとに進められたであろう。よって、講釈開始時（文明一七年¹⁴⁸⁵閏三月二十八日）には正徹本は未受容とし、共同研究の終了時点（文明一八年六月一八日）では正徹本との校合が完結したとする。そして、その後の各人の研究によって、年月の経過とともに正徹本の本文は新本文に取って代わられることになったであろう。

紅梅本の親本である上臈局本の成立したのは明応四年¹⁴⁹⁵六月一日であるが、紅梅本の青表紙本化が共同研究終了時よりも進んでいる⁽²⁹⁾ので、この間には他本との校合があったと判断される。つまり、正徹本の受容

度は、共同研究の終了時点よりも某かの低下が予想される。

紅梅本の親本である上藤局本の成立年が分かっているのに対して、肖柏本は、成立年をはじめ成立事情もわかっていない。いま分かっているのは、肖柏本は筆蹟から判断して肖柏自筆ではないことであり、肖柏手沢本を書本としているらしいと推測されることぐらいである。

この調査では、正徹本・紅梅本・肖柏本・日大本を取り上げる。調査した四本の成立は正徹本が先ず成立し、日大本は後尾につく。紅梅本と肖柏本の書本との先後については、分かっていない。

日大本についても参考のため併せて調査しておくが、日大本の場合、校合本によつては、紅梅本の正徹本受容から脱したり、紅梅本の正徹本不受容から正徹本に一致する本文になったりするので、正徹本との一致度は、結果的にそうになっている、というに過ぎない。

どの帖を取り上げるかに当たっては、『大成』において肖柏本が青表紙本系ではないとして所載していない帚木・花散里・野分・東屋の四帖、これに対する青表紙本系からも四帖を取り上げることにする。青表紙本系からの四帖は、桐壺・夢浮橋の二帖および恣意的選択による空蟬・若紫とする。

調査範囲は、紅梅本の一オから五ウまでに相当する範囲を対象とする。

正徹本の本文は、『大成』の青表紙本の欄に校異があるとして上がっている箇所（ただし、書入後に校異が解消される箇所は省略）を採取した。なお、その箇所において国文研究資料館蔵本（請求番号…サ四／七五／一―五五）と書陵部蔵本（請求番号…20―812―1―E）の二本の共通本文を正徹本の本文とし、二本に校異がある場合は採取しなかった。

調査結果を示すに当たっては、『大成』頁・行、正徹本の本文を挙げ、

続いて肖柏本・紅梅本・日大本の順に挙げる。正徹本に付した「A」印は正徹本が『大成』底本と一致することを示す。また各本が正徹本に一致することを「○」印、一致しないことを「×」印で示す。なお、「×」印「○」印の下を二行書きとし右行にその本文、左行にその本文の一致本を示す（一致本のうち、河内本系には「（）」を、別本系には「〔 〕」を付すが、「〔 〕」以外の一致本がない場合は「ナシ」と記し、近似本があれば（ ）内に記す。紅梅本に付した「○」印は肖柏本（肖柏本の書本が紅梅本に先行すると推測する場合）の不受容から受容に転じていることを示す。

この調査での収獲は、正徹本と紅梅本と日大本との異文の共有が二例見つかったことであり、この異文の共有は、三人の共同研究において正徹本が確かに校合本として用いられた証となるものである。

【正徹本と紅梅本と日大本との異文の共有】

巻名	大成	正徹本	肖柏本	紅梅本	日大本
野分	頁行 865 ⑪	岩ほをも	× 御大横池高	○ ナシ	○ (同上)
夢浮橋	2055 ⑫	おほく	× 池横 納陽平	○ ナシ	○ (同上)

野分・夢浮橋の肖柏本のこれらの本文は、おそらく、共同研究後に池田本あるいは横山本との校合によつて青表紙本化された書本を写した、と推測されるものである。紅梅本は、正徹本からの受容本文になっていて、『大成』では「〔 〕」以外には見つかからない本文であり、正徹本と紅梅本と日大本とに異文の共有があると判断され、紅梅本は確かに正徹本と校合されている、と言える。

さらに、三本とも正徹本と一致して正徹本を受容している箇所は、

表示するには多すぎるため記載を省略する。
そして、三本ともに正徹本を受容していない箇所も八例見つかった。

【肖柏本・紅梅本・日大本ともに正徹本を受容の八例】

卷名	大成 頁行	正徹本	肖柏本	紅梅本	日大本
桐壺	5④	Aのみ	「のみ」ナシ	×	×
常木	7⑥	Aわた殿の	「御殿」 「御麦」	×	×
空蟬	35①	おほかるなかに	おほかなるに 大松池	×	×
	86②	Aおりと	おりにと 「御」	×	×
	87⑫	Aきはくしと	きはくしう池 にきわくしく	×	×
	88⑥	Aにきわくしう	横 御かたにと 大「御宮保国」 つけても	×	×
東屋	1795⑫	御かたに	御かたにと 大「御宮保国」 つけても	×	×
夢浮橋	2055⑭	Aつけては	「桃」	×	×

これら三本ともを受容・不受容の例は、三本の密接さを示すといえる。

【正徹本・肖柏本・紅梅本・日大本の八帖におけるの調査集計】

卷名	正徹本と 大成底本との 一致率	肖柏本と 正徹本との 一致率	紅梅本と 正徹本との 一致率	正徹本と 日大本との 一致率
夢浮橋	(大) 63・6	86・4	90・9	81・8
東屋	(大) 42・3	80・8	96・2	92・3
野分	(大) 95・5	90・0	87・5	72・5
花散里	(大) 68・8	93・8	43・8	68・6
若紫	(大) 84・0	82・0	92・0	88・0
空蟬	(大) 51・5	78・8	84・8	81・8
帚木	(大) 63・6	90・9	81・8	81・8

上欄に調査結果を集計して示したが、これらの分析には、さらなる調査が必要となる。後考に俟ちたい。

六 日大本に残る『雨夜談抄』の痕跡

文明本成立後の一年二ヶ月間におよぶ源氏講釈の終了後から約一ヶ月半経過した文明一八年¹⁴⁸⁶八月四日条の『公記』に「抑宗祇新写源氏物語外題ハ五十四帖V今日染筆了」とあるとおり、源氏講釈での成果の加わった新たな宗祇手沢本②が作成された。宗祇手沢本①は文明本の書本であり、文明本成立の直後から始まった源氏講釈では正徹本との校合による本文の検討も行われ、三人それぞれの手沢本へは本文校訂のための書入れも増加し、また他の書入れも加わり読みにくくなっていったであろう。そこで宗祇手沢本①が清書的に書写され、その題簽を実隆が書いたのである。

この宗祇手沢本②が成立した時を一年余り遡る文明一七年¹⁴⁸⁵七月（講釈開始後三ヶ月余り経過した頃）に帚木巻の講釈も終わり、その成果の盛り込まれた宗祇著『雨夜談抄』（『帚木別注』とも）が成立している。この『雨夜談抄』について、所引本文の中の大島本との異文が比較的大きいとされる一八箇所を取り上げた上野氏の調査がある³⁰。そのなかから次の③⑪の二箇所を引用し、末尾へ日大本の調査を加える。

③ これは二の町の (雨肖書) — 二のまちの (大耕)

⑪ はひかくれぬかし (雨肖書耕) — はひかくれぬるおりかし (大)

『大成』 三六頁⑭ これは二のまちの (日)

『大成』 四四頁⑨ はひかくれぬかし (日)

この二箇所は、『雨夜談抄』・肖柏本・書陵部本・日大本が同文の箇所である。しかし③の日大本は、補入後本文が同文となるのであり⑪とは事情が異なるので検討対象から外し、唯一残った⑪を検討する。

まず、西家関連本にあたると、公条本 (実践女子大学図書館蔵山岸文庫)・実枝本は日大本と一致しているが、紅梅本が「はひかくれぬる^{かし}」である。この紅梅本の本文状況からは、実隆が原態文明本「はひかくれぬかし」を「はひかくれぬる」(未詳本)で校訂したと知られる。その際、元の本文をイ注として残すこととし、「はひかくれぬかし^イ」と書入れたことが読み取れる。この書入文明本を書写したのが上藤局本であり、その際には本行に付されたイ印に従い、「かし^イ」を注記として写し、校訂された本行本文として「はひかくれぬる」としたのである⁽³¹⁾。上藤局本は、その成立(明応四年¹⁴⁹⁵)以前に帯木の巻が既に書写されていたとして、当時の書入文明本は「はひかくれぬかし^イ」であったはずである。日大本の本文は原則として書入文明本を書写することが重ねられているだけの箇所が多いので、日大本はイ注付きの「はひかくれぬる^{かし}」

かイ注なしの「はひかくれぬる」であるはずである。しかし実際は「はひかくれぬかし」となっている。ここで思い出されるのは、長享元年¹⁴⁸⁷の宗祇いうところの正本との校合である。宗祇が正本を持参した翌日に実隆は文明本への書入れを行う。おそらく「はひかくれぬかし^イ」としたのであろう。つまり、未詳本とは、宗祇いうところの正本ではなかったか。明応四年の上藤局本成立のころのこの箇所の書入文明本はまだ「はひかくれぬかし^イ」のままである。しかし、日大本成立までの何時の時点かで、宗祇いうところの正本が実は正本ではなかったという確認が得られ、書入文明本の「る」と「イ」を消去することによって本文を元の本文「はひかくれぬかし」へと戻したのであろう。本文の流れを略示する。

⑪は、耕雲本を引き継いだ原態文明本と『雨夜談抄』の本文が肖柏本にも受け継がれたが、紅梅本が書写された段階では未詳本(おそらくは宗祇いうところの正本)の本文に校訂され、その後もとの本文がよび戻されたのであろう。

1485年の原態文明本「はひかくれぬかし」→1487年宗祇いう正本の「はひかくれぬる」で校訂するも元の本文をイ注として残し書入文明本「はひかくれぬかし^イ」となる→1490年ころであらうか上藤局が帯木巻を書写し、それを紅梅本が書写「はひかくれぬる^{かし}」となる→正本ではなかったと判明してもとの本文に戻す→「はひかくれぬかし」となる。

の青表紙本化の加わったものと見るべきであろう。

ところで、肖柏は、第二次『源氏物語聞書』の成立（長享三年¹⁴⁸⁹）後の明応五年¹⁴⁹⁶に手沢本④を新調している。おそらく、手沢本③への書入れが増えたため新調がなされたのであろう。

手沢本④の新調からさらに時が流れ、肖柏は永正七年¹⁵¹⁰六月一六日に『源氏物語聞書』を実隆に貸し出している（『公記』）。伊井春樹氏によれば、『源氏物語聞書』が流布するにつれ肖柏は貸出用のものも用意し、貸し出していたという^{（32）}。貸出用の本まで準備していることから、肖柏の潤沢な経済状況がしのばれ、『源氏』手沢本に關しても、度々新調できたことも肖柏にとっては、自然な行為であったのであろう。

続けて、伊井氏によると、実隆は、『源氏物語聞書』の書写を進めながら注記も加えていき、「永正七年八月一七日書寫了の草稿本を『弄花抄』と呼び、後日現存本のように整理していった」^{（33）}ようである。これらの伊井氏の御指摘のうちで注目される点は、國學院大学蔵『源氏物語聞書』の須磨に「同（永正）一二年九月一覽了」・松風に「文明一八六十六左合点了／永正二九 永正同六九月重加筆了／同十年五月一読了」と記されていることから、『弄花抄』ができあがっていたけれども、肖柏は自分の『源氏物語聞書』を破棄することなくあたためていた」とされる点（三四七頁）、さらに「その後もさらに所々の不備をただし、永正十六年には料簡に新たな年数を付記した。（中略）彼は、三十年間も加筆訂正を持続していたようである」（三四八頁）とされている点である。

肖柏の永正七年の近衛尚通邸での源氏講釈^{（34）}は自著『源氏物語聞書』を携えてのことであつたのであろうが、國學院大学蔵『源氏物語聞書』

の記事を参照すると、講釈を行いつつ加筆していったのである。三人共同の本文面での『源氏』研究終了後には、『源氏』の系図の研究についた時期があつたが、それを経て、宗祇は、『源氏物語不審抄出』（明応九年¹⁵⁰⁰）を実隆とも相談して執筆した。この後、最後の旅に出て、文亀二年¹⁵⁰²に箱根にて没したという。残る実隆・肖柏の二人も、それぞれが講釈を行いつつ注釈書執筆に勤しんだようである。

本文の青表紙本化にはもう専念することはなかったであろうが、長享元年¹⁴⁸⁷に宗祇の正本の持ち込みがあつたことから推測されるように、時には本文校訂もしたと推測される。肖柏が明応六年¹⁴⁹⁷に手沢本④を作成したのは、手沢本③作成（文明一八年¹⁴⁸⁶）の約一一年後のことであり、この間の成果が入つたのであろう。

記録に残っていないのに過ぎないのか、その後の肖柏の『源氏』新写は聞かない。あるいは、この手沢本④が肖柏最後の手沢本であつたか。日本に親近している現存肖柏本はこの手沢本④を直接あるいは間接的に写した本なのか、と想像が膨らむ。手沢本④から肖柏本が出てると仮定すれば、肖柏古本とは、手沢本③を指しているのではなからうか。

実隆は、日本本として現存している家本の作成に際して肖柏古本を重んじ、最後の仕上げに校合している^{（35）}。実隆は、なぜそれほどまで肖柏古本を求めたのか。『公記』の大永七年¹⁵²⁷四月一二日条を引用する。

宗堦来 夢庵去四日入滅之由 自堺申之云々 八十五才 三四日小惱滅云々 嗚呼 自少年其交久矣 光源氏物語宗祇他行之時多以此人令読之 其恩重者也 可惜可憐々々々々

宗祇が文龜二年¹⁵⁰²に死去して四半世紀後、今度は肖柏が旅出った。肖柏が永正一五年¹⁵¹⁸に堺に移住していたので、肖柏死去の報も遅れて届いた。遺愛の肖柏古本は、肖柏が死去して約二年半後の享祿二年¹⁵²⁹一〇月五日に実隆のもとへ借り出されたのである。

実隆は日大本の書本の大部を姉小路本に求めたが、姉小路本は上臈局本（南御方本）の兄弟本であり、これは信頼できる本文であつたろう。花宴および姉小路本を書本にした以外の帖は、文明本（A本）から三度・四度と書写が重ねられている³⁶。書写を重ねたこれらの書本は信頼度が姉小路本に比べると劣る。上臈局本の書本であつた実隆の所持本と近似本文であるはずの肖柏手沢本③を用いて校合する必要を感じ、肖柏手沢本③すなわち肖柏古本を求めた、ということなのかもしれない。

注記

- (1) 上野英子氏著『源氏物語 三条西家本の世界―室町時代享受史の一様相』（武蔵野書院、二〇一九）の「第三部 三条西家源氏物語の世界」、および、拙稿「三条西家の家本『源氏物語』について」（『名古屋平安文学研究会会報』三四号、二〇一一・三）参照。
- (2) 金子金次郎氏『連歌師と紀行』（桜楓社、一九九〇）八一頁。
- (3) 横井金男氏『古今伝授の史的研究』（臨川書店、一九八〇）では、古今伝授に際して受講者が最初に行うべき事として、テキストの書写が挙げられている。講釈者と受講者のテキストを同じものとする必要があつたのである。これより類推して源氏講釈においても用いられるテキストは、書入れや書写などによって同一となったテキストを宗祇・

肖柏・実隆の三人が準備した可能性が高い。ちなみに、大覚寺義俊や九条植通への公条の源氏講釈の際は、テキストの準備が出来なかった紹巴は単なる聴聞者であつたが、紹巴への公条の源氏講釈（永祿五年一〇月から同六年一二月以前）に際しては、公条所持本（日大本に該当する）との校合を許され、師のテキストとの同一化が図られた。（拙稿「紹巴本『源氏物語』について―夢浮橋の調査を中心にして―」、潮廻舎文庫研究所「年報」〇九号、二〇一一・三）参照。

(4) 上野英子氏著一八〇頁以下で論じられている。稿者も、今回、『雨夜談抄』を調査する。取り上げるのは、国文研究資料館初雁文庫蔵本によるが、宮内庁書陵部本と校異のある箇所は外した。次に掲出するA・Bに引用本文が挙げられていることは、Aは一字下げの解説文が続くことから明白であり、Bには末尾に「とは」とあることから明白である。

A 光源氏名のみことくしういひけたれ給とかおほかる（中略）
しのひ給へるかくろへことを（後略）（2オ1）

B しのひ給ひけるかくろへことを（中略）物いひさかなさよとは（4オ6）

同一本文を引用したA・Bを比較すると、AとBでは、「給へる」と「給ひける」の差が見られる。この宗祇の講釈は、非常に好評を博したが、宗祇は引用本文の正確さには無頓着で、講釈は物語の解説に重点が置いていたのであろう。

(5) 注(2) 所載の金子氏著。

(6) 『公記』文明八年八月一九日条に「晩頭肖柏来話 源氏物語夢浮橋巻可令書写之由先日被懇望 自昨夕立筆 今日終功 直遣之了」とあり、それまで使用してきた肖柏手沢本を書本にして寄合書で新写され、実隆は

夢浮橋を担当したのであろう。

- (7) 文明一八年二月二日条に「今日宗祇所望桐壺卷終書功」、同年八月四日条に「抑宗祇新写源氏物語外題ハ五十四帖ノ今日染筆了」とある。
- (8) 『公記』文明一八年一〇月八日条に「肖柏所望之源氏物語外題ハ五十四帖ノ分ノ染筆」とある。
- (9) 松原一義氏論文、稲賀敬二編『源氏物語の内と外』（風間書房、一九八七）所収。
- (10) 長谷川千尋氏論文「連歌俳諧研究」（二二九号。二〇二〇・九）所収。
- (11) 伊井春樹氏著『源氏物語注釈史の研究 室町前期』（桜楓社、一九八〇）一六九頁～一七一頁。
- (12) 加藤洋介氏「了俊・兼良の源氏物語——書陵部蔵源氏物語をめぐる——」（愛知県立大学説林）四七巻、一九九九
- (13) 注（7）に同じ。
- (14) 肥前島原松平文庫蔵『弄花抄』。
- (15) 注（8）に同じ。
- (16) 注（3）に同じ。
- (17) 注（1）所載の上野英子氏前掲書二二六頁・三二五頁参照。
- (18) 上野英子氏「山岸文庫蔵「畊雲本源氏物語」解題」（『年報』一五号、一九九六・三）。なお、論文で紹介されている現存の実践山岸文庫本については、「澪標・蓬生・薄雲が④延徳書写本（親長筆）、二四冊は②文明書写本（親長筆）、補写二七冊」とある。
- (19) 「『新出資料紅梅文庫旧蔵本を中心とした三条西家源氏物語本文の再構築に関する研究』月例研究会」（二〇二一・一二）での発表時に、上野英子氏よりこの記事の存在を御教示頂いた。『看聞御記』は、続

群書類従補遺2下による。

- (20) 応仁の乱勃発の四年半後にあたる文明二年1470七月二八日条（『大乗院寺社雑事記』）の長谷寺に預けた荷物の中に「源氏一合」があり、文明二年二月二〇日条（『同』）の長谷寺から取り寄せた荷物の中に「源氏一合」がある。
- (21) 注（17）に同じ。
- (22) 注（4）参照。「B本文からA本文への流れ一覧」の表ではNo.14・25・37に宗祇の誤写が疑われる。
- (23) 伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一）三七五頁による。
- (24) 実隆が約五年二ヶ月間、家本として使用した本。この本については注（1）所載の拙稿で論じている。
- (25) これに該当するものに、『畊雲本奥書及跋歌』（東海大学桃園文庫蔵、現写本、一冊）がある。
- (26) 『京都女子大学研究叢刊2』（一九七三）
- (27) 注（19）所載の月例研究会（二〇二一・一二）での発表時に、上野英子氏よりこの記事の存在を御教示頂いた。
- (28) 加藤洋介論文、「国文学」46—14、二〇〇一・一二。
- (29) 注（17）に同じ。
- (30) 注（1）所載の上野英子氏前掲書一八七頁。
- (31) 拙稿「三条西家本『源氏物語』の実隆による校訂——本注と本無注をめぐって——」（『中京国文学』三一号、二〇一二・三）で論じている。なお、七五頁下欄の「9」の例は削除する。
- (32) 伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』（東京堂出版、二〇〇一）三四七頁。

(33) 注(11) 所載の伊井氏前掲書の三五二・三五三頁。

(34) 注(11) 所載の伊井氏前掲書の三四六頁。

(35) 『公記』 享祿二年一〇月五日条に「自能洲源氏本被借送之夢庵所持之古本也 先日予所望者也」とある。

(36) 拙稿「三条西家の家本『源氏物語』について」(『名古屋平安文学研究会会報』第三四号、二〇一一・三) で論じたが、結論に代えて掲げた図表を、本書所収の拙稿「上藤局本『源氏物語』写しの二本をめぐって」の注(24) に転載している。なお、その図表には、書本の転写回数を記している。